

おかめのはなし

THE STORY OF O-KAME

小泉八雲作・田部隆次訳

登場人物

八右衛門

おかめ

寺僧

ナレーター

◆土佐国。八右衛門は、死に際の妻・おかめと約束をする。
◆ナレーター、八右衛門、おかめ

土佐の国名越の長者 権右衛門の娘 おかめは、その夫 八右衛門を非常に好いていた。女は二十二、八右衛門は二十五であった。余り夫を愛するので、世間の人は嫉妬の深い女だろうと思った。しかし男は嫉妬されるような原因を作った事もなかった。それで二人の間にはいやな言葉一つ交された事もなかった。

不幸にして おかめは病身であった。結婚後二年にもならないうちに当時土佐に流行していた病氣にかかって、どんな良医も匙を投げるようになった。この病氣にかかる人は、喰べる事も飲む事もできない、ただ疲れてうとうとして、変な夢に悩まされているだけであつた。おかめは不断の看護を受けながら、毎日次第に弱つて行つて、とうとう自分でも助からぬ事が分つて来た。

そこで彼女は 夫を呼んで云つた、

おかめ 『私のこのいやな病氣中 あなたがどんなに親切にして下さったか口では云えません。こんなによくして下さる方はどこにだつてありません。私、あなたに別れるのが本当につらい。……考えて下さい、私まだ二十五にもなりません、——その上私の夫ほどよい人はこの世にはありません、——それでも私は死んで行かねばならない。……いいえ、駄目、駄目、気休めをおっしゃっても駄目ですよ、どんなお医者だつてどうにもならないのですもの。もう二三ヶ月生きていたいと思いましたが、今朝鏡を見たら、

今日のうちに死んで行かねばならぬ事が分りました、

——そう、丁度今日です。それであなたにお願がありますの

——私が安心して死んで行けるように思つて下さるようなら、

——その願を私にかなえさせて下さい』

八右衛門 『一寸云つて御覧、何だか』

八右衛門は答えた、

八右衛門 『私の力でできる事なら、どんな事でも喜んでして上げる』

おかめ 『それが——あなたのちつとも喜ばない事なんです』

彼女は答えた、

おかめ 『まだ若いのですもの、こんな事をお願いすることは、

中々——大変——むつかしい事ですわ、でもその願事は

私の胸に燃えてる火のようです。死ぬ前に云わせて下さい。

どうぞ。……ね——あなた、私が死んだら早晚、皆で

あなたに奥様を持たせるでしょう、ね、あの、約束して

下さいませんこと、もう二度と結婚はしないと、

——おいやですか……』

八右衛門 『何だ、そんな事か』

八右衛門は叫んだ。

八右衛門 『願事と云うのはそれだけの事なのか、それは何でもない。

よし、約束した、お前の代りは決して貰わない』

おかめ 『ああ、嬉しい』

おかめは床から半分起きて叫んだ。

それからうしろへ倒れた、同時に彼女の息は絶えた。

一場

◆おかめの死後、やつれる八右衛門を、周囲が心配する。
◆ナレーター、八右衛門

おかめが死んでから、八右衛門の健康は衰えて来るようであった。初めはその様子のvarietyようを、人々は人情の悲しみの故と解釈していた、それで村人達は『どんなにあの奥様が気に入っていたのだろうか』とばかり噂していた。しかし月が重なるにつれて、段々蒼白くなり弱くなりして、遂には人間ではなく幽霊ではないかと思われる程、痩せやつれて来た。それで人々はそんなに若い人がこう急に衰えるのは悲しみだけでは説明ができないと疑い出した。医者達の説では、八右衛門の病氣は普通のものではない、様子は何とも解し難いが、何か心の異常のなやみから起っているらしいと云う事であった。両親は色々尋ねてみたが駄目であった。――彼の云う処では、両親の知っている以外には、何等悲歎の原因はないとの事であった。両親は再婚をすすめた。しかし死人に対する約束はどうしても破る事はできないと云い張った。

それからあと、八右衛門はやはり日増しに衰えた、家族の人々はその生命を危んだ。ところが ある日の事、かねて何か心に隠している事を信じていた母が、熱心にその衰弱の理由を云ってくれるように 烈しく泣いて頼んだ、母の懇願には勝たれなくなった。

八右衛門『こんな事はあなたにもまたどなたにも全く云いにくい事です、すっかり申上げて見た処で本当にはできませんまい。

実はおかめはあの世で成仏ができないのです、それからいくら仏事を行ってやりましても駄目のようです。私も一緒にその冥土の旅に出てやらないとどうしても成仏ができないようです。おかめは毎晩帰って来て、私のわきにねます。葬式の日から毎晩、来ない晩はありません。それで時々本当に死んだのではあるまいと思う事があります、様子や行いは生きていた時と全く同じですから、――ただ私に話をする時、小さい声で物を云うだけです。それから、いつでも、自分の来る事を誰にも云わないようにと申します。私にも死んでもらいたいのでしょう。私も自分だけなら生きていたくはありません。しかし、全く仰せの通り私のからだは両親のもので、両親に先ず第一に孝行しなければなりません。それで、本当の事を皆申し上げるのです。……はい、毎晩丁度眠りかけると参ります、それから明方までいます。鐘が聞えると出て行きます』

二場

◆寺僧の提案により、八右衛門・親族の前でおかめの墓を開ける。
◆ナレーター、寺僧

八右衛門の母がこれを聞いてびっくりした。直ちに檀那寺へ急いで寺僧に息子の告白の一切を話して助力を乞うた。高齢で、経験の積んだ寺僧はその話を聞いて驚く色もなく、彼女に云った。

寺僧『こう云うことは時々あるものです、始めてではありません、それで御子息も助けて上げられると思います。しかし今大層危い処です。愚僧の見る処では、お顔に死相が現れています、おかめさんがもう一度帰って来れば、もうそれきりです。それで即刻やるべき事をやらねばなりません。御子息に黙っていて下さい、大急ぎで双方の親戚を集めて、寺へ来るように云って下さい。』

御子息のために おかめさんの墓を開けねばなりません。』

そこで、親戚はお寺に集った、墓を開く事を一同承諾したので、僧は一同を墓地へ案内した。そこで、その指図に随っておかめの墓石はわきへやられ、墓は開かれ、棺は上げられた。棺の蓋が取られた時、居合わせた人は胆を寒くした。それはおかめは病気の前と同じく綺麗に、顔に微笑を浮べて一同の前に坐って、――彼女には何等死のあととはなかったから。しかし、僧は棺の中から死人を取り出す事を人々に命じた時、驚きは恐怖となった、それは長い間 正坐の形を取っていたにも拘らず、その死体は触わると生きているように暖かく、しなやかであったから。

それを葬場へ運んで、僧は筆を取って額と胸と手足に何か

聖きよい功徳くどくのある梵字ぼんじを書かいた。それからその屍しかばねをもとの場所ばしょへ葬ほうむる前まえに、おかめのために施餓鬼せがきを行おこうた。

彼女かのじょは再ふたび夫おとの処ところへ来こなかった、八右衛門はちえもんは次第しだいに健康けんこうと力ちからを回復かいふくした。しかし彼かれはいつまでもその約束やくそくを守まもったかどうか、それは日本にっぽんの作者さくしやは書かいていない。

〈完〉

原案

しんせんひやくものがたり

『新選百物語』

かんのに

卷二』

より

しつと

「嫉妬にまさる梵字の功力」

ほんじ

くりき

妬どなれば去さるとは七去しちきよのひとつ、いかさま女おんなのねたみ悋りん気きよりして、
家いえを乱みだり身みをそこなう事ことすくなからず。女おんなの第一だいいち慎つつしむべきの
道みちぞかし。

今はむかし、土佐とさの国くに名越なこしというところに、八郎兵衛はちろべえという者ものの
嫡子ちやくしに、八右衛門はちえもんとして生年しょうねん二十五歳にじゅうごさい、つねづね父母ふぼ※※つかえ、
至いたつて正直しょうじきなれば、近郷きんきやうのこれ沙汰さた、ほめぬものもなかりけり。

その家いえのとなり、田地でんちもつくりて山やまなどを持もちし、権右衛門ごんえもん
というものあり。娘むすめ二人持ふたりもちけるが、姉あねはおせん、妹いもうとをお亀かめといひ、
姉あねには智むこをとらし家督かどくをつがせ、妹いもうとをば八右衛門はちえもんが妻つまにつかわし、
夫婦ふうふとなしぬ。

お亀生得かめしょうとく悋りん気きふかく、八右衛門はちえもん近所きんじよに出いでてさまざまとねたみ
怒いかり、まして城下じやうかなどへ公用こうようにて行ゆくにも、是非ぜひなき事ことと思おもいながら、
癖くせの事ことなれば、食事しょくじもせず湯水ゆみずも飲のみず、おもいわずらい臥ふしてのみ
暮くらしける。然しかれども、八右衛門はちえもんすこしもそそけぬものなれば、
終ついに夫婦ふうふのいさかいなく、※なく暮くらせしが、いかなる事ことにや、
お亀かめ二十二歳にじゅうにさいの春比はるころより、ぶらぶらと煩わづらひて、いろいろと養生ようじやうさせ、
城下じやうかの医師いしへ療治りやうじを頼たのみ、薬くすりも残のこるところなく、神仏しんぶつへも
祈願きがんすれども、ちから及およばず、次第しだい次第しだいに衰おとろへて、頼たのみすくなく
なりけるが、或夜あるよ八右衛門はちえもんに言いけるは、わたくし不慮ふりよの病やまいを請うけ、
ながながの御看病ごかんびやう、身みにあまり忝かたじけなく御礼申おれいもうすに余あまりあり。
今朝けさまでも今いままでも、今一度いまいちどは本復ほんぶくして添参そいまいらせんと存ぞんぜしが、
最前さいぜん鏡かがみに向むかい見るに、かようにやつれまいらせては、たとい
鎖くさりにつながても、唐天竺からてんじくの名医めいいをまねき、良薬りやうやくをほどこしても、
本復ほんぶくすることかたかるべし。三十みそぢにみたず過行すぎゆくことも、過去かこの宿業しゆくごう

※※あけて事もなし。去ながら、ひとつの願※※※※※※※※※※※※※※※※
八右工門は不便さまさり、何とて※※※正念あやまり給ふぞ、
身に叶ひたるの儀なりとも、其方の望を達しせん、※※※さず
語られよとねんごろに尋ねれば、お亀いまはの眼をひらきて、
嬉しの仰せや 忝や、我身むなしくなりたるのち、かならず妻を
持給うな、是のみ心残りにて胸をこがし身をかなしむ、あら熱や
堪がたやと、煙のごとき息ふき出し、齒をくいしばり眉逆立ち、
悪相一般にあらわれければ、地獄の苛責思いやられ、すさまじき事
かぎりなし。八右工門は見るにたえかね、言葉をあらため、さほど
すこしき望事、何ゆえこれまでつつみ給うぞ。心やすかれ死後に
おいて、一生妻をめとるべからず。もし此言葉に偽りあらば、
立所に氏神の御罰を蒙るべし。いさぎよく往生し給え。かならず
疑い給うなど、いい聞すればむつくと起き、あら嬉しやと七転八倒、
虚空を掴み うんとばかり、最後の念ぞすさまじき。八右工門は
涙ながら、葬送仏事のこりなく、かたのごとく執行ないしが、
いつとなく八右工門、極めて病氣というにもあらず、次第次第に
衰うれば、一門中も不審をなし、入かえ入かえ毎日見舞、様子いかが
と尋ねれば、氣ぶんにすこしも別条なしと、詞をはなつて言けれども、
いずれも一円承引せず、お亀最期に臨みし時、一生妻を持つまじと、
誓いをなして契りし由、もとより正路の八右工門、ことばをかえじと
思えども、若き者の事なれば、色には心のうつる最中。されども
誓いし詞あれば、思い暮して心氣をいため、かく衰うるものならん。
もしさもあらば兎に角に、後妻をめとらで叶わぬ身分、とてもすることに
其人と、夫婦になさんと一決して、八右工門の方に寄り集まり、其もと

近頃形衰え、はなはだもって軽からず。病氣と問えば悩みもなし、
実儀なる其元なれども、木石ならぬ事なれば、心のうつる人もありや、
かならず隠し給うなやと、皆一同に問いかくれば、八右工門は色をかえ、
いかないかな拙者において、左様の心さらさらなし。日外より各々方、
顔色日々に衰うると、立替りての御尋ね、あら心得ずと思ひしが、
いかさま近頃あやしき事あり。申し出すもいかなれども、浅からざる
御真実、くわしく明し申すなり。お恥しき事なれども、お亀
相果申す夜より、夢ともなくうつともなく、寝るかと思まお亀が
来り、そひ寝すると覚えしこと、昨夜まで廿日に及べり。さてはお亀が
死したるを、不便に思うところより、出るところの夢なるべしと、
思い直して臥おれども、寸分違わぬ夢のさま。夢は五臓の虚といへども、
顔色までも変る事、かたがた思ひ合すれば、これ唯事にあらずと、
始めて驚くばかりなり。一門共も不審をなし、かかる怪しき物語
少しも延引すべからずと、旦那寺の和尚を招き、しかじかの由言
のぶれば、和尚しばらく考えて、この妖怪に似たる事、いにしえも
ありしぞかし。八右工門の顔色も、のこらず死相をあらわせば、
一命の終らん事、明日日に※くべからず。
其証拠を見すべきまま、お亀の墓をあばかるべしと、皆引連て
墓に至り、掘返して取出せば、廿日にあまる屍の、埋みし時の
ごとくなれば、和尚はさこそあるべしと硯取りよせ、屍に
あき所なく梵字を書付、八右衛門を呼寄せ、今夜はお亀の屍を抱き、
子の半刻を待けるが、漸亥を過ぎ子に到る。今や今やと考え見れど、
虫の音ばかりいとさびしく、何の怪しき事もなければ、あら心得ずと
思うところに、抱きし亡者の屍より、手毬のごとき火の玉出でて、

いづくともなく飛行とびゆきけり。すはや今いまぞと息いきをつめ、またたきもせず居いたりしが、半時はんときばかりも過ぎすつる頃ころ、火ひの玉たま虚空こくうを飛とび歸かえり、死人しにんの口くちに入るいぞと見えみしが、しだいしだいに暖あたまり、眼まなこをひらき大息おおいきつぎ、今宵こよいは夫おつとをともしなひ来きたり、我わが妄執もうしゅうを晴はらさんと、残のこる方かたなく尋たずぬれども、夫おつとを見みずとふりかえり、うしろをきつと見み、莞爾にっこと笑わらい、御身おんみはここに居いたまうか、かほどに我われを思召おぼしめし、草くさの蔭かげまで付添つきそい給たまう、御心みこころとはつゆ知しらず、恋こいしい夫おつとを娑婆しゃばに残のこし、ほかの女おんなに添そわせんは、これわが迷まよいの第一だいいちなれば、今夜こんやは是非ぜひに誘さそい来きたり、ともに冥途めいどにおもむかんと、宵よいより尋たずねまいらせし。最早もはやのぞみはたりぬるぞと、言いうとひとしく眼まなこをふさぎ、屍しかばね氷こおりのごとくに冷ひえ、鶏にわとりの声こえかすかに聞きこえ、寺々てらでらの鐘かね八やつを告つぐ。

和尚おしょう同宿どうじゅく出て来きたり、八右はちえ工門もんは宵よいよりの、始終しじゅうをくわしく申上もうしあぐれば、手てを打うて大おおいに悦よろこび、われさもあらんと思おもいしゆえ、障しょう礙がいを除のぞくの法ほうを行おこない、汝なんじが命いのちを救すくいしぞと、再ふたび埋うずみて仏事ぶつじをなし、残のこる方かたなく弔とむらいければ、其後そのちなん何なんの障さわりもなかりし。

過去かこの縁えんとは言いいながら、恐おそろしかりし執着しゅうじやくなり。

〈完〉

The Story of O-Kamé

Lafcadio Hearn

O-Kamé, daughter of the rich Gonyémon of Nagoshi, in the province of Tosa, was very fond of her husband, Hachiyémon. She was twenty-two, and Hachiyémon twenty-five. She was so fond of him that people imagined her to be jealous. But he never gave her the least cause for jealousy; and it is certain that no single unkind word was ever spoken between them.

Unfortunately the health of O-Kamé was feeble. Within less than two years after her marriage she was attacked by a disease, then prevalent in Tosa, and the best doctors were not able to cure her. Persons seized by this malady could not eat or drink; they remained constantly drowsy and languid, and troubled by strange fancies. And, in spite of constant care, O-Kamé grew weaker and weaker, day by day, until it became evident, even to herself, that she was going to die. Then she called her husband, and said to him:—

"I cannot tell you how good you have been to me during this miserable sickness of mine. Surely no one could have been more kind. But that only makes it all the harder for me to leave you now.... Think! I am not yet even twenty-five,—and I have the best husband in all this world,—and yet I must die!... Oh,

no, no! it is useless to talk to me about hope; the best Chinese doctors could do nothing for me. I did think to live a few months longer; but when I saw my face this morning in the mirror, I knew that I must die to-day,—yes, this very day. And there is something that I want to beg you to do for me—if you wish me to die quite happy."

"Only tell me what it is," Hachiyémon answered; "and if it be in my power to do, I shall be more than glad to do it."

"No, no—you will not be glad to do it," she returned: "you are still so young! It is difficult—very, very difficult—even to ask you to do such a thing; yet the wish for it is like a fire burning in my breast. I must speak it before I die.... My dear, you know that sooner or later, after I am dead, they will want you to take another wife. Will you promise me—can you promise me—not to marry again?..."

"Only that!" Hachiyémon exclaimed. "Why, if that be all that you wanted to ask for, your wish is very easily granted. With all my heart I promise you that no one shall ever take your place."

"*Aa! uréshiya!*" cried O-Kamé, half-rising from her

couch;—"oh, how happy you have made me!"

And she fell back dead.

*

Now the health of Hachiyémon appeared to fail after the death of O-Kamé. At first the change in his aspect was attributed to natural grief, and the villagers only said, "How fond of her he must have been!" But, as the months went by, he grew paler and weaker, until at last he became so thin and wan that he looked more like a ghost than a man. Then people began to suspect that sorrow alone could not explain this sudden decline of a man so young. The doctors said that Hachiyémon was not suffering from any known form of disease: they could not account for his condition; but they suggested that it might have been caused by some very unusual trouble of mind. Hachiyémon's parents questioned him in vain;—he had no cause for sorrow, he said, other than what they already knew. They counselled him to remarry; but he protested that nothing could ever induce him to break his promise to the dead.

*

Thereafter Hachiyémon continued to grow visibly weaker,

day by day; and his family despaired of his life. But one day his mother, who felt sure that he had been concealing something from her, adjured him so earnestly to tell her the real cause of his decline, and wept so bitterly before him, that he was not able to resist her entreaties.

"Mother," he said, "it is very difficult to speak about this matter, either to you or to any one; and, perhaps, when I have told you everything, you will not be able to believe me. But the truth is that O-Kamé can find no rest in the other world, and that the Buddhist services repeated for her have been said in vain. Perhaps she will never be able to rest unless I go with her on the long black journey. For every night she returns, and lies down by my side. Every night, since the day of her funeral, she has come back. And sometimes I doubt if she be really dead; for she looks and acts just as when she lived,—except that she talks to me only in whispers. And she always bids me tell no one that she comes. It may be that she wants me to die; and I should not care to live for my own sake only. But it is true, as you have said, that my body really belongs to my parents, and that I owe to them the first duty. So now, mother, I tell you the whole truth... ..

Yes: every night she comes, just as I am about to sleep; and she remains until dawn. As soon as she hears the temple-bell, she goes away."

*

When the mother of Hachiyémon had heard these things, she was greatly alarmed; and, hastening at once to the parish-temple, she told the priest all that her son had confessed, and begged for ghostly help. The priest, who was a man of great age and experience, listened without surprise to the recital, and then said to her:—

"It is not the first time that I have known such a thing to happen; and I think that I shall be able to save your son. But he is really in great danger. I have seen the shadow of death upon his face; and, if O-Kamé return but once again, he will never behold another sunrise. Whatever can be done for him must be done quickly. Say nothing of the matter to your son; but assemble the members of both families as soon as possible, and tell them to come to the temple without delay. For your son's

sake it will be necessary to open the grave of O-Kamé."

*

So the relatives assembled at the temple; and when the priest had obtained their consent to the opening of the sepulchre, he led the way to the cemetery. Then, under his direction, the tombstone of O-Kamé was shifted, the grave opened, and the coffin raised. And when the coffin-lid had been removed, all present were startled; for O-Kamé sat before them with a smile upon her face, seeming as comely as before the time of her sickness; and there was not any sign of death upon her. But when the priest told his assistants to lift the dead woman out of the coffin, the astonishment changed to fear; for the corpse was blood-warm to the touch, and still flexible as in life, notwithstanding the squatting posture in which it had remained so long.¹

It was borne to the mortuary chapel; and there the priest, with a writing-brush, traced upon the brow and breast and limbs of the body the Sanscrit characters (*Bonji*) of certain holy

¹ The Japanese dead are placed in a sitting posture in the coffin,—which is almost square in form.

talismanic words. And he performed a Ségaki-service for the spirit of O-Kamé, before suffering her corpse to be restored to the ground.

She never again visited her husband; and Hachiyémon gradually recovered his health and strength. But whether he always kept his promise, the Japanese story-teller does not say.

原案

『新選百物語 巻二』より「嫉妬にまさる梵字の功力」

- ・ 平井呈一 訳『全訳 小泉八雲作品集 第十巻 骨董・怪談・天の川綺譚』〈恒文社、1964 年〉
- ・ 平川祐弘 編『怪談・奇談 小泉八雲名作選集』〈講談社学術文庫、1990 年〉

参考資料

- ・ 「小泉八雲 おかめのはなし（田部隆次譯）／附・原拠「新撰百物語」巻二「嫉妬にまさる梵字の功力」（オリジナル翻刻・完全版）」Web サイト『Blog 鬼火～日々の迷走』〈2019 年 9 月 6 日更新〉

https://onibi.cocolog-nifty.com/alain_leroy_/2019/09/post-8d915c.html

底本を元に、参照資料を用いながら、現代仮名づかいの読み下し文に書き換えました。

原文からの変更点は以下のとおりです。

1. 一部に、空白を入れ、分かち書きとしました。
2. 読みやすさを考え、漢字、かな、句読点など変更した箇所があります。
3. ふりがなを、ののラジオの解釈のもと、加えました。
4. 元の文字がつぶれるなど不明な箇所は、そのスペース分だけ「※」を入れました。

英語原文

Project Gutenberg

https://www.gutenberg.org/cache/epub/55473/pg55473-images.html#The_Story_of_O-Kame

Title: Kotto: Being Japanese Curios, with Sundry
Cobwebs

Author: Lafcadio Hearn

Illustrator: Genjiro Yeto

Release date: September 1, 2017 [eBook #55473]

Most recently updated: October 23, 2024

Language: English

Credits: Produced by Marc D'Hooghe at Free
Literature (online soon in an extended version, also
linking to free sources for education worldwide ...
MOOC's, educational materials,...)

Images generously made available by the Internet
Archive.)

Podcast ののラジオ 好評配信中！



視聴・購読はこちらから
<https://gekidannono.com>

ご意見・ご感想はこちらへ
radio@gekidannono.com

劇団ののでは、名作文学を声に出して演技し、収録した音声を Web 上で配信しています。複数名で読むラジオドラマタイプ、単独で読む朗読タイプなど、様々な形で朗読をしています。

みなさんも一緒に朗読を体験して楽しんでもいただけるよう、本文に出てくる言葉や物語の解説も、公式サイト上で公開しています。

いつか国語の教科書で読んだ気がする、芥川龍之介・宮沢賢治・夢野久作などのあの作品やこの作品、ぜひ、役者の声でお楽しみください。

劇団ののと読む名作文学 小泉八雲作・田部隆次訳 『おかめのはなし THE STORY OF O-KAMÉ』 Podcast 版

発行日 令和 7 年 11 月 15 日

著 者 小泉八雲作・田部隆次訳

編 集 劇団のの

発 行 劇団のの

[https://gekidannono.com/
radio@gekidannono.com](https://gekidannono.com/radio@gekidannono.com)

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。

ゴシック体のルビは、原文に振られていたものです。

底 本 『小泉八雲全集第八巻 家庭版』第一書房（1937）

初 出 明治 37(1904)年

図書カード URL

<https://www.aozora.gr.jp/cards/000258/card59425.html>

